
ミセスシンデレラーその後ー

昭穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミセスシンデレラーその後I

【コード】

N2929C

【作者名】

昭穂

【あらすじ】

10年前のTVドラマミセスシンデレラの続編。ハッピーエンド版

『それぞれの帰る場所』

「……光と別れ泰之を選んだみずほ。泰之のかごの中で生きようと決めたのだ。ローマから戻った泰之とみずほ。空港から戻ったみずほ達は自宅のマンション、玄関前で立ち止まる。促すように玄関を開ける。泰之は中に向かって「ただいま。」と声をかける。振り返り、みずほを中に促す泰之。亮子が「おかえり。」と迎える。笑顔は無いが肯定的態度で迎える亮子。リビングに入り3人で腰をかける。黙ったまましばらく時間が過ぎる。泰之が口火を切る。亮子に向かって泰之は意を決したかのように話し始める。「お袋、俺はローマまでみずほを迎えに行つた。堀井さんと別れたみずほをどうしてもあきらめられなかつた。みずほも戻ることに同意してくれた。分かつて欲しい。子供のことも今後のことも俺に任せて欲しい。」頭を下げる泰之。うなずきながら泰之の姿を見て亮子はみずほと泰之を見比べる。「私は泰之のために戻って欲しいと頼みに行つたくらいですからね。あなたたち夫婦の出した結論に何も口出ししませんよ。子供だつてここで生まれれば香山の長男になるんですから。ただ、あなたの決意が甘いと判断したら意見させてもらいますよ。」亮子は二人に言い聞かせるかのようにまっすぐと二人を見つめる。康之はうなずく。みずほは「お義母さん……」とつぶやくように言う。亮子に申し訳なさそうにうつむく。みずほに面と向かい話し始める泰之。「みずほ、俺は今までお前がしてくれていることが当たり前だと思つていた。でも、違つた。失いかけて初めてお前の存在が大事だつて事に気づいた。ローマまで迎えに行つた。いろいろあつたが、このうちに戻ってきてくれた。」うなずきながら聞くみずほ。泰之は続ける「今後生まれてくる子供は誰がなんと言つても俺とお前の子として育てたい。DNAとか血液型とか関係ない。お袋と3人で産まれてくる子供を迎えたいと思う。」泰之の言葉に亮子もう

なずき応える。うつむき涙を流しながら応えるみずほ。「あなたの子じゃないかもしれない十字架をあなたに背負わしてしまうことになつてしまう・・・。」顔を上げ、じつと泰之を見据える。泰之は意を決したかのように力強く話す。「それでも戻つてくれたお前と子供を大事にすると誓う。俺はまたフラフラするかもしれない、子供が大きくなつて迷うことがあるかもしれない。それでも、お前とこれからも夫婦として生まれてくる子供の親として家族の時間を過ごして生きたいと思う。」見つめあう泰之みずほをほほえましそうに見ながら、泰之・みずほの手を取り亮子が重ねる。「泰之の決心が本当かどうか、みずほさん、私がちゃんと見守っていますよ。あなたがこの香山家で子供を産むと決めたらその子は、香山家の長男になるんですから。愛だの恋だの一時の感情は時間が忘れさせてくれますよ。」

また日常が戻つてきた。でも今までとは少し違う関係の中で。みずほはイタリア語教室を続けながら、時々世田谷図書館でセロ弾きのゴージャをおなかの子に読み聞かせた。家の家事もそつなくこなし、康之への気配りも忘れない。いくら戻つても心の中で今までの出来事は無しにはならない。光のくれた灯はずつと消えない。イタリア語教室の帰り道で光の曲を聞くこと、そして世田谷図書館によつてゐること。それだけは、どうしても家族には言えなかった。みずほのわずかな感傷、誰にも言わない心の中だけの秘め事だった。光のプロポーズを断り、光が押ししてくれた背中、コレでいいのだと心に言い聞かせた。一生のうちが一番だいい光との時間の想い出を胸に秘め、泰之、亮子と日常を過ごす。泰之の言葉で戻ることを決めた自分も好きにならなければ、生まれてくる子供に顔向けできない。そんな思いを胸に、家族3人で生まれてくる子供を待っていた。しかし、親友直美に言われた「ご主人の子で無かつたら先々難しいんじゃないかしら？」という言葉も忘れないでいた。自分への戒め。もしそのことで何かあれば償った後で子供と二人家を出る覚悟を決めていた。日常は問題なく過ぎていきいよいよ出産。泰之は分娩室

の前でうろつろしている。その姿に目を細めながら亮子は「しつかりしなさい。お父さんになるのですよ。」と泰之に声をかける。泰之も「お、おう。」と答えると亮子の隣の椅子に座る泰之。

陣痛で苦しみながらみずほは光のことを考えていた。そばにいてほしいのはやっぱり光だった。しかし、それはみずほの心の中だけの思いかかわぬ夢だった。一人陣痛に耐えたみずほ。しばらく時間が過ぎ、やがて聞こえてくる産声。分娩室から看護師が出て来て泰之たちに伝える。「男のお子さんですよ。」泰之は「よし！よくやった。やったぞ！」と手放して喜ぶ。病室に戻った母子。みずほの病室の横で眠る赤ちゃんに泰之が恐る恐る手を伸ばしている。目覚めたみずほはそんな泰之を見つめ感謝する。心からの感謝の笑顔を泰之に向けた。その笑顔のそこで光にも感謝の気持ちで心がいっぱいになっていく。ひとりになって赤ちゃんを見つめるみずほ。赤ちゃんの横にそつと「セロ弾きのゴージュ」をおいた。

泰之は良太郎と命名し、3人で幸せな時間が過ぎていく。良太郎は「セロ弾きのゴージュ」を大事にしながら育っていく。光の愛読書だとは泰之は知らない。3歳の誕生日、泰之は良太郎に小さなピアノを買う。みずほには「俺にはコレくらいしか出来ないけどな。こないだ、デパートに行った時、ピアノで楽しそうにしていただろ。だからなんとなく買ってやりたくなったんだ。良太郎が楽しければいいんだよ。」と笑ってみせる泰之だった。しかしその笑顔の影で泰之は複雑な感情に満たされていた。ピアノを与えられた良太郎は楽しそうにピアノに触れる。泰之の心のどこかで良太郎のピアノへの関心はある影を落としていった。『もしかしたら・・・』泰之は心の中で堀井のことがよぎってはその存在をかき消していた。泰之の心を見抜いていたみずほは複雑な思いでうなずく。泰之の心にある思いに気づき、申し訳ない気持ちになっていた。リビングの隅に置かれたピアノで良太郎は育っていく。ピアノは亮子にとっては昔を思い出す存在だった。実は亮子は昔ピアノを習っていたことがあった。「昔、大好きな人がピアノを弾いていて、どうしても習いた

いって両親にわがまま言ったの。香山家に嫁いだからは姑に気を使
って関わらないでいたんだけど。懐かしいわ。」亮子は楽しそうに
良太郎と一緒にピアノを弾いた。亮子とピアノを弾く良太郎の姿は
みずほに辛い記憶を思い出させていた。もしかしたらという疑問。
でも確かめないでこのまま皆で過ごしていくのが一番幸せなのだ
と言いつけていた。光は自分のために自分ですくすくの灯を消して
くれた。想い出の中の光を愛する気持ちは心の中に秘め、泰之たち
家族との時間を大事にしなれば。複雑な思いのみずほはその夜、
ベランダで星を眺める。心の中であの曲がよみがえる。光のくれた
ろうそくの火は一生消えない。光のことは一生忘れない。みずほの
心に灯っている。今は志織と幸せに暮らしているだろう光の幸せを
祈っていた。

・・・・・・ローマにとどまった光

みずほと別れた光は明日の見えないまま作曲に取り組んだ。みずほ
を抱きとめられなかった後悔。香山さんと幸せになっっているかの疑
問。確かめられないもどかしさ。そんな光の傍にはいつも志織がい
た。みずほと別れた光はみずほへの思いを曲にこめることで、再び
作曲家として大成功をおさめていた。志織はどうしても光を忘れら
れず、みずほを愛したままの光でも結婚したいと父に仲を取り持っ
てもらい3年後に光と結婚。一人娘を出産。光もまた志織に愛情が
無いわけではない、あの教会で自分のみずほへの思いはろうそくの
炎と共に消した。心のそこに封印した。志織の愛に応えようと結婚
を決意したのだった。二人の結婚生活は穏やかに過ぎていったが、
志織の心はさびしかった。ローマのある部屋の中グランドピアノを
前に作曲をしている光。光の仕事部屋だ。「パパ！」駆け寄る少女
を抱き上げる光。ひざの上に乗るとピアノを弾き始める少女。志織
が光に声をかける「あなた、一段したら散歩に連れて行ってくださ
いね。」少女をひざに乗せたまま遠くを見つめる光。その視線の先
にはいつもみずほがいた。遠くを見つめる光の視線に志織は気づい
ていた。志織は妻として光を山の神として深い愛情で愛していると

信じていた。光にとって志織は神のような存在になりたかった。光の心にみずほがいるままでも光を愛していた。だから結婚した。しかし志織は光の山の神にはなれなかった。光の浮気なら許せる。しかし本気の恋は許せなかった、いや忘れさせてあげられなかった。志織は光を愛しているからこそ、光の心が手に取るようにわかり、光の心に再び火をつけることができないことが寂しかった。志織の心はいつも泣いていた。志織には、光自身に光と結婚後に紹介された共通の友人がいた。その人の元に子供をつれて何度も相談に行っていた。何度も逢ううち、志織はある感情に気づきだしていた。この人といるとき光さんと一緒のときとは感じなかった感情、違う感情がわいてくることを。それが何なのか志織にはまだ分からないでいた。結婚生活、光とのこと、子供のこと、すべての相談を聞いてくれる人。光の前で流せなかった涙も流せる。光の心が遠く感じて寂しさに耐え切れなくなつて何度も電話した。いつでもやさしさに満ちて答えてくれた。光のことも何もかもさらけ出せる人。志織を支えてくれる人。寂しくて会いにいくと、なぜか穏やかな心になつて光の元に戻ることができた。少女と志織と散歩する光。楽しそうにな3人の風景。陽だまりの中、志織は寂しそくに微笑んでいる。そんな時間の中志織は考えていた。光は私を見てはいない。心の中でくすぶる灯を消せないでいる。でも光は娘を可愛がつている、愛してくれている。不幸だとは思わない、でも私は光の妻として幸せなのだろうか？光の娘として、娘は幸せなのだろうか？志織の心は寂しかった。自分には愛する光の娘がいる、子供さえいてくれれば私は生きていける。光の初めての深い傷を残した恋。光を遠く感じた。

『重い十字架』

《6年後》

光の育つた同じ幼稚園で指揮をする男の子。その姿を見守る亮子とみずほ、遅れてきた泰之。三人でビデオを撮る。帰り道、坂を下り

ながら息子に聞かれるみずほ。「ねえ、お母さんも王子様を待つているの？女の子ってみんな王子様が迎えに来るのを待つているのでしょうか？みかちゃんが、言っていた。」良太郎に尋ねられ、手をつなぎ良太郎に応えるみずほ。光と泰之が交差する中で母として良太郎に答えるみずほ。「王子様は向こうから来るものじゃないの。自分で見つけるものなのよ。」みずほのことは良太郎は「ふん。」とよく分らないとばかりに答えた。みずほは続ける「お母さんはもう見つけたけどね。」心の中にいる光を思い出しながらも泰之に微笑みみずほ。亮子と腕を組んで3人で坂を下りていく。幸せだと言い聞かせた瞬間。走り出す良太郎の後ろを亮子と泰之と三人で坂を下りるみずほ。笑顔を見せながら心の中でちくりと痛みを感じていた。良太郎は気づいているのかもしれない。泰之を選んだといながら心の中にいる光の存在を。大人三人を置いて坂を駆け下り、角を曲がった良太郎に急ブレーキの音が響く。急ブレーキの音にあわてて角を曲がる三人。「良太郎。」みずほの悲鳴。頭から血を流し倒れている良太郎。「良太郎！」良太郎を抱き上げながらみずほは名前を叫ぶことしかできなかった。

救急車のサイレンの中、3人に付き添われ、病院に運ばれた良太郎。頭から血を流し、真っ青な顔でストレッチャーに乗ったまま、小児集中治療室の中に消える良太郎。看護師がバタバタと走り回っている。待合室から心配そうに見守る亮子、泰之、みずほ。三人にとって長い時間が流れる。処置室のドアが開き医師がやってくる。泰之に向かい医師が伝える。「とにかく出血が多く危険な状態です。とりあえず、全力を尽くします。」小児集中治療室に消える医師。それからみずほたちにとって長い時間が過ぎた。亮子は、良太郎が産まれた時の事、一緒にピアノを弾いたことを思い出していた。泰之は良太郎が産まれてからお父さんと呼ぶ姿を思い出していた。みずほは泰之と光のことを考えていた。良太郎と泰之、光の三人がクロアスしていた。暗闇の待合室で3人が待つっていると再びドアが開く、中から医師が出てくる。泰之に向かって医師が説明する。「とりあ

えず、何とか持ちこたえました。今後、出血がなければ、何とかなるのですが。お子さんの血液型が珍しく血液が足りないのも、また大量の出血が起きると命の保障はできません。ご家族の中で同じ血液型の方がいると思いますので連絡をして協力をしていただけるようにしておいてください。」医師の言葉に見つめ合う泰之とみずほ。亮子も心配そうに病室をのぞく。みずほの心に光が浮かぶクロスしていた泰之・良太郎・光の三人の中で泰之だけが遠ざかっていく気がした。それをかき消すように心で叫ぶ。「あの子はあの子なの。誰でもないわ。私が心の中の光さんを思い出したから神様が罰を与えたのかも・・・。」光をかき消すみずほ。光を忘れられない自分への神様の罰だと感じていた。そんなみずほの横で泰之は医師の言葉を受けある決意をしていた。亮子もまた泰之の思いを察していた。償うかのように良太郎のそばにいたいと面会時間一杯看病し、家には帰らず小児集中治療室の待合室に泊り込むみずほ。良太郎が元気になるまで自分への戒めとしてみずほは指輪をはずし良太郎の首にかけた。みずほの戻らない自宅。病院から二人、自宅に帰って食卓に向かい合い話し合う泰之と亮子。泰之は思い切ったようにまっすぐ亮子を見つめはなし始める。「良太郎がこんなことになるなんて・・・。みずほを取り戻し、俺のわがままであいつの父親になっただれど。やっぱり・・・良太郎は・・・。おれはどうしたらいいのだ？」亮子に救いを求めてすぎる。亮子はさとす様に泰之に向かい「しつかりしなさい。良太郎は死なない。（仏壇に目をやり）あの人あなたのお父さんだつてついている。孫を呼んだりしないわ。」「いたたまれず、椅子から立ち上がり、うろろと歩き出す泰之を心配そうに亮子は見ている。立ち止まり、亮子に口を開く。「おれは・・・。やっぱり堀井さんに連絡したほうがいいと思う。良太郎は俺の子だ。誰がなんと言おうと変わらない。でも良太郎の命がかかっている。良太郎と6年間家族として生活できたのは6年前堀井さんが俺に連絡をくれたからだ。」泰之にうなずきため息をつく亮子。「そうね。あなたがそうしたいのならね。ただ、どんな結果になっ

てもあなたが後悔しなければいいのだけど。私だっっていまさら、大事な孫と娘を誰かに取られてたまるものですか。でもそれは私たちのわがまま、私たちのエゴより、良太郎にとって何が一番いいのかを考えてやらなければならぬのかも知れないわね。」堀井に連絡をすると決めた泰之だったがみずほのいない寝室のベッドに座り込み、しばらく携帯を持ったまま時間が流れた。泰之は考えていた。まだ、みずほの心のそこには光がいる。6年間、そばでみずほを見てきたからこそ分かる。でもあいつは隠してきたそれは俺に対する愛情だ。あれからみずほは一度だって悲しそうな顔なんて見せたことが無いじゃないか。駄々泰之にはある心配もあった、今も堀井さんの心にみずほがいるのだろうか。良太郎のことなど忘れていたらそのときはそのときで俺が良太郎を助けるだけだ。もしも、少しでも良太郎への思いがあれば堀井さんは良太郎を助けに来るだろう。そのとき俺はどうしたらいいんだろう。悩む泰之だったが携帯を見つめ思い立ったように携帯を広げる。片手には古びたメモが握られていた。6年前、堀井から連絡のあったときに聞いていた連絡先。そこに堀井がいればまだ連絡を取れる。思い切ったかのように電話する泰之。

ベルが鳴る……。ローマにつながる。ローマの光の自宅の部屋で電話がなっている。

『山の神にはなれない、もう一人のシンデレラ』
志織は食事に誘われていた、光の親友の男性とレストランで3人、食事をしていた。穏やかな時間の中、突然、チェロを弾き出し志織にプロポーズする。「(イタリア語)光を愛し、光と結婚して、いろんなことに悩んで、たくさんの涙を流した君を勇気付けることができた、僕は幸せだった。でも君と関わっていくうちにどうしても友達としては関われぬ、そのことに気づいた。親友の光を裏切ることになっても、君と過ごしたいと思った。(日本語)光の元を飛び出して僕のところへ飛んできて欲しい、今の志織を受け止めた

い。志織に寂しい思いはさせない。いつでも君を見ている。君の娘と光を愛した志織を愛している。(イタリア語)僕の歴史の中に志織達を刻んで生きたい。時間をかけて同じ方向を向いてよい夫婦になろう。ぼくは、彼女の父親になりたい。君の家族になりたい。」その言葉を聞き熱い涙を流す志織。抱きしめられてとても穏やかな気持ちになった。志織は気づいたのだ、人を好きになることを、恋するという気持ちを。しかし光の妻として同時に光のことが心配になっていった。志織はこみ上げる感情を隠し家に帰った。自宅に光はいない、仕事部屋で作曲をしていた。光の帰りを待ったが志織は一人眠りに着いた。夜遅く光は自宅に戻ってくる。志織の寝顔を見つめながらも、志織の隣で何も気づけずに眠りについた。翌日、自宅で三人が過ごしていると電話が鳴る。志織が電話を取る。彼からの電話だった。「(イタリア語)志織だね?実はさつき電話でウィーソンのオーケストラに就任が決まった。一緒に来て欲しい。」一瞬光を見つめる志織。志織の視線に気づかず娘と話している光。電話の向こうで言葉が続く。「光のことが心配だろうが僕についてきて欲しい。僕のそばに君が必要なのだ。出発は1週間後だ。」戸惑う志織は受話器を置いた。電話を切った志織に気づき、そばで見っていた光は志織にたずねる。「誰から?」気持ちを隠しながら志織は応える。「あなたの親友からよ。ウィーソンのオーケストラに就任が決まったそうよ。」驚きながら喜ぶ光。「そうか、ついに羽ばたくことになったのか。これからはどんどん大きな男になっていくのだな。」光の言葉を戸惑いながら聞く志織に光は気づけないでいた。翌日、光は彼のために就任パーティーを開く。パーティーの席では何も無かったかのように振舞う志織たちだった。志織にとって長い一週間が過ぎて行く。光に彼のこと、電話の事、何度も言おうとしながらも言えないまま時間が過ぎる。迷った志織だったが「娘を含め、光を愛した志織を愛する。いろいろあるだろうが、長い時間をかけて良い夫婦になれるようにしたい。」と誓ってくれたときに感じたあの喜びを信じ、彼と夫婦になる決心を固めていた。そんな志織は出

発の日、手紙を書いて荷物をまとめる。光への手紙を置いて娘と二人部屋を出る。空港で彼の胸に飛び込む志織。三人で飛行機に乗りウイーンへと向かう。自宅に戻った光はピアノの上の手紙に気づく。志織からの手紙だった。一緒に離婚届と指輪が入っていた。『堀井志織』サインがしてある。

「光さんへ　ごめんなさい。私は家を出ます。父に頼んであなたを取り戻せたと思ったけど、あなたは感情なくしたまま心をぶつけてはくれなかった、私ならあなたの感情を取り戻せると自信があったのに。駄目だった……。私の差し伸べた手はあなたには無意味だった。私の心が寂しいときあなたは私を見てくれなかった。それはあなたが私を妹としてしか愛してくれてなかったから。あなたが与えてくれた愛はあの時の私の愛とは違っていた。今ならみずほさんの心がわかる。あなたの親友に私プロポーズされたの。ずっと相談をしてきて私の心が壊れなかったのは彼のおかげです。あなたを傷つけても私は彼を選びます。彼の愛を知って、今なら私の光さんへの愛の意味が分かるわ。ずっとそばにいて……。あなたに感情を取り戻してあげられなかった。でも3年前あなたが結婚しようと言ってくれたときは本当にうれしかった。たとえ、心のどこかに誰がいようと……。あなたのことが心配です。どうか前を向いて歩いて欲しいです。いつか笑ってまた光さんに会いたいです。家族なのですもの何処にいてもあなたを愛しています。　志織」手紙を握り締めうつむく光。自宅はがらんとしていた。来客のチャイムが鳴る。雨宮が尋ねてきた。リビングで向かい合う二人。雨宮が先に口を開く。「光君。すまない志織が……。」「さえぎるように光が話し出す。「志織は僕の家族です。謝らないで下さい。今回のことはすべて僕の責任です。僕の作る音楽は志織の心に明かりをとすことはできなかつたんです。でも彼なら志織を幸せに、志織の心に暖かい灯をともしてくれるでしょう。志織には感謝しています。音を失ったときに僕を支えてくれた。恋に破れたときも支えてくれた。志織は僕を彼女の全てで包んでくれたのに僕が応えてやれなかった。

志織を傷つけてしまったのは僕ですから。「雨宮に頭を下げる光。顔を上げさせ雨宮は光に「すまない、君にそういつてもらえると救われるよ。父親としては志織が本当の恋を見つけたと思っている。志織が君に向けた感情とは違う本当の愛を見つけたのだと。志織は自分の本当の王子様を見つけたのだと信じたい。志織はウィーンに向かった。落ち着いたら、また話そう、家族で。」光は感謝の笑顔を雨宮に向ける。「有難うございます。」と礼を伝え雨宮を送り出す。光は志織を追いかけることは無かった。がらんとした自宅でピアノに向かう。曲を作る。初めて志織に贈る曲。翼を広げ飛び立っていった志織への曲は、花嫁を送り出す父親の感情に似た曲だった。その曲をウィーンに贈った。ウィーンからは二人の幸せそうに微笑む志織の写真と手紙が送られてきた。イタリア語で書かれた手紙【親友の光、君から志織を奪うことになってしまったが、後悔はしていない。君の心に志織がない以上、僕が志織を幸せにする、妻として愛する。見ていてほしい。また、志織と3人で君に会いたい。幸せな志織を君に見せてあげよう。僕の家族と会って欲しい。いつかまた競演する日まで。】志織と生活していた部屋を片付ける光。荷物を持って部屋を出る。離婚手続きを終え、みずほを迎えるために借りていた部屋を借りなおす光。想い出の中で生きていこう、みずほを思い、以前のままに・・・僕には音楽がある。中央に置かれたピアノ。その上には小さな箱の中にダイヤの指輪がのった羽が保存されている。みずほが返したあの指輪だった。光は志織と結婚後も大事に持っていたのだった。光はピアノで想い出の曲を弾きだすFLY IN M。自宅を出てローマの町を一人歩く光。スペイン階段で志織との結婚生活を思い出し、みずほに思いを寄せる光。自宅に戻ると電話がなっている・・・。日本からの国際電話だった。そうとは知らず電話に出る光「（イタリア語）もしもし」電話のむこうで泰之が答える「あ・・・あの。もしもし？香山と言います。」受話器のむこうで光が絶句する「・・・」光の表情が変わる。

『同じ灯が命を救う』

6年の時間が交差するローマと日本。泰之は携帯を握り締め、重い口を開く。「6年前はどうも。時間がないので単刀直入に言います。あいつ6年前に息子を産んでくれました。」光は安心したかのような表情で聞く。続ける泰之。「僕の子であると育ててきました。しかし昨日、良太郎は交通事故にいました。何でも良太郎は珍しい血液型だそうで、出血が多くて血液が足りません。命の危険があります。もしも、堀井さんの血液型が・・・。」光ははつとした表情になる。泰之は続ける。「おれは6年前堀井さんのおかげであいつとやり直すことができた。あいつと良太郎を取り戻した。でも良太郎をどんなに独占しても良太郎から見れば俺のわがままなのかもしれない。俺のエゴで良太郎をこのまま・・・本当の・・・会えないままなにかあればと思うと・・・良太郎にとって大事なことは何なのかを考えなければと思いました。」決意したかの表情になる光。受話器を握り締め、「分かりました。日本に行くことを許してくれるのですか?」泰之は一瞬戸惑うが「許すも何も・・・選ぶのは堀井さんですから。それでは」電話を切る泰之。真つ暗な寝室で眠れぬ夜をすごす。

連絡を受けた光は飛行機の中にいた。光はみずほのことを思っていた。そしてまだ見ぬわが子への思いで心がかき乱されていた。なぜ、あの6年前にみずほの十字架を背負ってやらなかったのだろう・・・。差し伸べた手をどうしてしっかりと握ってやらなかったのだろう、自分の子供だった。そのことで家族とまた辛い思いをしているのではないのか。家族への自責の念に押しつぶされ、寂しさに心がつぶされてはいないだろうか・・・。光にとって長い飛行時間が過ぎていく。日本が遠く感じられた。

5日間を集中治療室の待合室で過ごすみずほ。心の中で叫んでいた「根性・・・根性・・・ど根性・・・」6日目の朝、朝日で目が覚めると医師がバタバタとし始め不安げなみずほ。医師がみずほに歩み寄る「容態が変わりました。血圧が下がっています。また出血し

たことが考えられます。血液を準備はしていましたが、ご家族の中に同じ血液型の方が見えるはずです。その方にご協力を依頼するかもしれません。呼んでおいてください。」医師の言葉にうつむくみずほ。医師は再び小児集中治療室に消えた。泰之に連絡し、待合室の椅子に腰掛けみずほは考えていた。・・・AB型RHマイナス・みずほは分かっていた。家族の中に良太郎を助けてやれる人間はいない事を、なぜなら泰之はO型、義母はA型。私はB型・・・良太郎と同じなのはRHマイナスということだけ・・・良太郎の父親は・・・突きつけられた現実。良太郎の消えかけた命。親友直美の言葉がこだまする。幼稚園での発表会の後の帰り道、坂を下りながら良太郎についてしまつたうそ。神様、誰でもいいから良太郎を助けてください。私はどんな罰でも受け入れますから。みずほは祈っていた。病室の向こうの朝日の中から現れた影に気付くみずほ。それは病院の廊下の向こうから走りこんでくる光の姿だった。息を切らせながらみずほの前にやってくる光。息を切らせながらまっすぐみずほを見つめる。「香山さんから連絡を貰った。すぐに飛行機に乗ったんだけど遅くなってしまったね。何も言わなくていい、君の幸せを壊すつもりは無い。君の王子様は君の隣にいるんだ。いまさら何をしてもいい。でも彼を助けられるのは僕しかいない。今彼に差し伸べられる手をぼくがもっている。だからやってきた。」再会もつかの間、処置室のドアが開き振り返るみずほと光。医師が二人の前に立つ「やはり血液が足りません。AB型RHマイナスのご家族の方ですね？こちらへ。」うなずき医師と共に中へ消える光。採血をしている光の処置室のカーテンのむこうで血の気の無い良太郎が横たわっている、その枕元に「セロ弾きのゴーシュ」が見えた。光はみずほの心を知ったのだった。待合室に残されたみずほは考えていた。光さんが来てくれてこんなにも心が躍るなんて良太郎の命よりも今、光にあえたことがうれしかった。でもそんな気持ちは忘れなければと心に言い聞かせていた。良太郎の命が消えないように祈っていた。

知らせを受け、タクシーで病院につく泰之。小児集中治療室の待合室で迎えるみずほ。「良太郎は?」みずほを見据える泰之。なんていっていいのか戸惑いながら、みずほは泰之に「今、光さんが」と言い、うつむくみずほ。みずほの肩を抱き問いただすように、泰之は聞く。「来てくれたのか。堀井さん。そうか・・・。俺が連絡したんだ。」みずほの肩から両手を離し、みずほから離れ、小児集中治療室の処置室のほうに視線を移す。「助かってくれ!良太郎」処置室に向かい、祈る泰之。後ろからみずほが泰之の腕をつかむ。「なんで?あなたの子だって、DNAとか関係ないって、いつてくれたのに。」うるたえながら涙を流すみずほを椅子に腰掛けさせ泰之は静かに話し始めた。「もちろん、関係ないさ。良太郎は俺の子だ。俺とお前の子供だ。それは変わりない。ただ、良太郎の命に関わるんだ。誰なら良太郎を助けられるのか、良太郎にとって一番いい方法を考えたんだ。」寂しげな表情のみずほの肩を抱く泰之。二人にとって長い時間が過ぎた。小児集中治療室のドアが開く。医師が歩み寄ってくる。「新鮮血のおかげでお子さんは命を取り留めました。もう出血の可能性はないでしょう。しかし、まだ意識が戻りません。今後を診ていかなければなんとも・・・」立ち去る医師に深々と頭を下げる泰之とみずほ。見つめあう二人。二人で良太郎の寝顔をみて、安心したかのように病室を後にする。泰之はみずほの手を取り光の病室の前に立つ。泰之に促され光の病室へ入るみずほ。泰之はそつとその場を立ち去り自宅へ向かった。ベッドで横になる光の横に座るみずほ。心のそこから逢いたかった感情がわきあがってくる。でもそれは心の中の秘め事。手を伸ばせば光がいる現実。でも手を伸ばしたら消えてしまう気がして寂しさも同時に感じていた。みずほは頬を流れる涙を手でぬぐい光を見つめ、つぶやく。「ありがとう、光さん。」お礼だけ告げ、光が目覚める前にそつと病室を出るみずほ。みずほが病室の戸を閉めると、そつと目覚める光。「やっと十字架を背負うことができた。」とつぶやく。起き上がり、病室のベッドを片付ける。そのままみずほは家には帰らず、小児集

中治療室の待合室に残った。光はその夜のうちにそつと集中治療室の前を通り、みずほの姿を見つけた。みずほに気づかれぬように、しばらく見つめ、そのまま病院を出る光。翌日、世田谷図書館に行きセロ弾きのゴージュを手に思い出していた。昔の二人を。日本は六年前と同じ風景で光を迎えてくれた。光はそのまま日本にとどまっていた。いつものホテルセンチュリーハイアットで。

1ヶ月がたつても良太郎の意識は戻らない。症状は安定したため一般病棟に移される。良太郎に付き添うみずほ。亮子も献身的に良太郎を見舞う。目覚めない良太郎を見つめながら不謹慎とは思いつながら、思い出すのは光との幸せだった3週間。(あの幸せな時間があれば頑張れるって決めたじゃない。あの子の6年間だって不幸じゃなかった。泰之さんは優しくしてくれた。お義母さんだって変わってくれた。戻らなきゃ、このまま良太郎が目覚ましても大丈夫なように。光さんへの気持ちを隠し切れなかった私への罰だわ。)

良太郎の見舞いの前に親友に会いに行くみずほ。直美の前でみずほは素直に気持ちを伝える。「やっぱり光さんの子だったの。それを知って光さんはローマから来てくれて血液をくれた。しかも主人が光さんを選んでくれた。それでも主人何も変わらないって。このままこの電車に乗っていていいのかな？泰之さんに十字架を背負わせたままで。」切ない目でみずほを見ながら直美は答える。「光さんの子供だって分かって十字架の重さにたえられなくなった？きつい現実だよ。しかも良太郎君は眠ったままなのでしょ？でもさ、みずほ。あんたが母親なのに代わりは無いじゃん。しかもみずほは誰にそばにいて欲しいのか分かってはいるはずだよ。ご主人達にはもう十分償ったんじゃないの？彼はどうしているの？彼は何て？会いに来るの？」首を振るみずほ。光とはあれで会っていなかった。「泰之さんにもお義母にも十字架を背負わせている。分かっているの。償うために戻ってきたのに、新しい罪を犯している。良太郎がどうなるかわからないのに。やっぱり自分のしたこと責任は自分で取らなきゃ駄目だったのよ。」みずほの心の中である決心がついていた。

みずほの薬指に指輪は無く良太郎に預けたままだった。もう戻れないと決意する。「やつぱり、私、良太郎を連れて家を出たほうがいいわね。」直美は悲しそうにみずほを見つめ「旦那には申し訳ないけど、みずほはもう十分償ったと思う。良太郎君と二人で生きていくのもひとつの選択なのかも。でもみずほ、ほんとにそれでいいの？ダレにそばにいて欲しいのか分かってるのに。」うなずき遠くを見据えるみずほ。「光さんには光さんの六年間がある。光さんの歴史を変えるわけには行かない。どんなに消しても光さんに貰った灯は消えなかった。一度大空を見てしまった私は夫の鳥かごの中では生きられないのよ。気持ちを隠して生きていかなければいけないのに、それができなかった。」直美と分かれ病院に向かうみずほ。

『響け！君の魂に』

みずほに会わないように毎日、病院を見舞う光。ある日病院の看護師に光が有名な堀井光だとばれてしまう。看護師に声をかけられる光。「堀井光さんじゃありませんか？わたしファンなんです。どなたかお知り合いでも入院されているのですか？」光は戸惑いながら答える「ちよつと知り合いが……」看護師は光にたずねる「お悪いのですか？」看護師の質問に光は何も言わず「……」無言で微笑み、ごまかす。光が病院に来ていることはあつという間に病院職員の話題になった。それを聞きつけた院長はコンサートの話を光に持ちかける。院長室に呼ばれる光。院長は光に「病院には音楽はありません。でも音楽は病気の治療に用いられることもあるのです。どうか病気の方々に希望の光を与えていただきたいです。」院長の言葉に光はコンサートの開催を決意する、良太郎のために。「僕の音楽で癒すことができるのならよこんで。できれば小児病棟で行いたいのですが。」光の要望に「そうですね。子供たちは未来のある希望。その子達の希望の灯にしたいですね。」院長は快く了承してくれた。小児病棟でのコンサート準備。小児病棟にコンサートのチラシが貼られる『子供たちへのコンサート。希望の灯がともるよ

うに世界的に有名な堀井光ボランティアコンサートを行います。明日十四時開演 小児病棟フロアにて 小児病棟スタッフ 病室に張られたコンサートのチラシを見てみずほは光が日本にとどまっていることを知る。光への思いがあふれ出す。でも光には逢わず病室の良太郎のそばに付き添う。コンサートの準備ができ、光はピアノの前に座る。ホールには患者やスタッフがあふれていた。病院に響くピアノの音。良太郎のそばで耳を傾けるみずほ。手を握り良太郎に寄り添うみずほ。コンサートが終わりに近づき光はFLYING Gを弾きだした。わずかに良太郎の手が動く。それに気づいたみずほ。「良太郎。良太郎！」みずほの叫びにゆっくりと目を開ける良太郎。ナースコールを押すみずほ。医師たちが病室を訪れる。良太郎は意識を取り戻したのだ。コンサートを終え、光が病院関係者と話していたところへ看護師が走ってくる。看護師は光に向かい興奮気味に話す。「堀井さんの音楽で意識の戻った子がいます。すばらしいですね。音楽つて。」看護師は光に伝えおじぎをして、勤務に戻る。看護師の言葉に良太郎が目覚めたことを知る。やさしく微笑みうなづく光。後片付けを終え、病院関係者に見送られ、うれしそうに微笑みながら病院を後にする光。病院からタクシーでホテルセントクリーハイアットのスイートルームへ戻る。窓辺に立って涙を流す光。(僕にはまだ暖かな涙があふれる心が残っていた。忘れていた……。良太郎はそれを思い出させてくれた。)ピアノに向かい、新曲を作る光。良太郎・みずほへの応援曲。CDにして楽譜とそれを残しホテルを出る。タクシーに乗り、郡山のみずほの父の墓前に立つ。(みずほさんが心から幸せで穏やかな日々が過ごせるようにお父さんが見守ってください。僕も遠くから彼女の幸せを祈っています)新しい花を供えた。墓参りをし、空港に向かう中、良太郎、みずほを思って幸せに微笑んでいた。飛行機に乗り、ローマに戻る光。良太郎の身に起こっている悲劇を知らず。みずほの幸せを祈り、身を引く光。

意識が戻ったとの知らせを受け、病院に駆けつける亮子と泰之。病

室の良太郎に向かって話しかける。「良かった。わかる？良太郎。おばあちゃんよ。」泰之も話しかける「お父さんだ。良太郎・・・」良太郎は分からないとばかりに首を振る。良太郎は事故によって今までの記憶を失ってしまったのだ。事実を知った亮子は「何てことなの。6年間で消えてしまった・・・」と泣き崩れた。泰之は寂しそうに「はじめからやり直すだけだ。何も変わらない。そう、俺がみずほをしっかりと抱きしめていれば。」と自分自身にも言い聞かせていた。みずほは二人の影で悲しそうに微笑んだ。良太郎が眠ったのを確認し、病院を出たみずほ。家には向かわず、光との想い出のホテルセンチユリーハイアットに向かうみずほ。いつものスイートルームに入る。ピアノの上にはCDと楽譜が残されていた。光を追いかけたい気持ちになりながらとどまるみずほ。そして考えていた、親友直美のところで考えていたことを家族に伝えなければ。亮子と泰之から重い十字架を取り除くために。十字架を一人で背負う決意。目覚めない良太郎をつれて二人で生きようと・・・決めた。そう、いまは記憶を失ってしまった良太郎と二人で生きていくことを。決意を固めたみずほは病院に戻る。病室でCDに涙を流す。やさしい穏やかな気持ちで泰之に話せる、そう思っていた。泰之もきつと分かってくれる。良太郎の首から指輪をはずし持ち帰る。

『十字架の罰』

記憶を失った良太郎は自分自身さえ分からない恐怖から感情のコントローラーができなくなってしまう、混乱するようになっていた。みずほは抱きしめることしかできなかった。良太郎は光からのCDを聞くとわずかに落ち着くようになっていた。しかし泰之にそのこととは言えないでいた。看病に通い、泰之たちに言えない良太郎の変化を胸に秘め、良太郎と二人で生きる決意を言えないでいた。みずほは自分の心をもてあまし、亮子の体の変化に気づくことができなくなっていた。ある日、病院から帰ると亮子は自宅で倒れていた。良太郎の看病や家を空けるみずほに代わって無理をして体調を崩し、

くも膜下出血であっけなく亡くなってしまったのだ。葬儀が終わり、亮子の部屋を片付けているとみずほ宛の手紙を見つける

「みずほさんへ 泰之のわがままであなたをローマから連れ戻し、泰之の子でないかもしれないという十字架を背負ったまま香山家にもどってくれて、良太郎と6年間過ごしてくれて有難う。泰之も離婚という汚点を残さず大企業で部長になれた、感謝しています。こんな手紙を書くつもりは無かったのだけれど、このところどうも体調が良くないので主人が迎えに来てくれているんだと思います。だから私の死後あなたが困らないようにこの手紙を書くことにしました。あなたはもう十分償ってくれたわ。自分に正直に生きてもいいのではないかしら。どうしていくのか二人でちゃんと話し合って、憎みあわず、最良の結論を選んでくれると信じています。良太郎の未来のために。今までのように流されしないで。良太郎が事故にあつて私たち家族は夢から現実に引き戻されました。良太郎の幼稚園の発表会での指揮者姿は私にとってもとても誇らしかったです、しかし、泰之の子ではないと、香山家の血をひいてはいないと、良太郎に言われた気がしました。家族だけど家族ではないそういわれた気がしました。ローマから堀井さんが良太郎のためにやってきてくれたこと。そして堀井さんのピアノで良太郎が目覚めたとき、私と泰之の役目は終わったと悟りました。幸せな時間を有難う。良太郎の幸せのために生きて頂戴。泰之も私もあなたの家族なのですから家族に本当の気持ちを隠す必要はないのですよ。泰之も6年間で随分変わったから大丈夫でしょう。あなたの選択は誰も傷つけたりしません。 亮子」手紙を読んであふれる涙が止まらないみずほ。手紙を抱きしめ時間がとまってしまふ。夕方、仕事を終え、帰宅する泰之。亮子の部屋で泣いているみずほを見つける。泰之は声をかける「おい。・・・」みずほは何も言わない。みずほは手紙を泰之に渡す。ソファーに座ってみずほに黙って差し出された手紙を読む泰之。みずほをまっすぐ見つめ泰之は「お前はどうしたいんだ？良太郎は俺の子だ。お前を失いたくは無い。」泰之の前に座るみずほ。

二人はリビングで向き合い座る。みずほが話し始める。今、泰之に伝えなければ自分の決意を、みずほはまっすぐ泰之を見据える。「今まで言おう言おうと思っていたことがあるの。そんな中、お義母さんなくなってしまう。でもあなたに伝えなきゃ。お義母さんが亡くなって、あなたを一人ぼっちにしようことになっても、やっぱり良太郎と二人で暮らしていきたい。二人で気長に治療するしかないと思っているの。良太郎が事故にあって真実がわかってしまった以上、あなたに重い十字架は背負わすわけにはいかない。6年前あなたに甘えてここに帰った私の選択が間違っていたの。流されてしまったのかもしれない。やっぱり、私一人が背負うべきだと思っっています。郡山に帰って二人で暮らします。」泰之は何も言えな
いままでもいた。まんじりともしない時間が過ぎ、二人は互いに背を向けベッドで眠りに着いた。翌朝、会話なく泰之を送り出したみずほ。自宅を片付け、離婚届と良太郎に預けていた指輪を香山家に置き荷物をまとめて出て行く。良太郎を退院させ、新幹線で郡山に向かうみずほ。郡山の実家を片付け、郡山の父の墓前にむかうみずほ。父の墓前は綺麗にされていた。花も新しいものが備えてある。みずほは住職に尋ねる。「名前は言われませんが、お父様の死後すぐに若い男性の方がやってきて大事な方だったので、よろしく頼むといわれました。毎月きちんとお花代やら管理代を払ってくれているので、私どももきちんとさせていたと思います。つい先日もお墓参りにみえていましたよ。」住職の話聞き、すぐに光だと気づいた。泰之さんとローマから戻って一度もここへは来なかった。泰之でないことは明らかだった。みずほは父に申し訳ない気持ちで一杯になる。(ずっとここにこないでほったらかしにして、ごめんなさい。知らなかった。光さんがここに来ていたなんて、お父さんごめんなさい。でもこれからは私が……。良太郎とここで暮らすことにしたの。その報告と、今日はここに相談に来たの、お父さん、一度だけ、一度だけ良太郎を連れてローマに……。わがままなのかな?・・・でも、少しでも良太郎の心に響けば……。そう思っ

たの。光さんにはあえなくてもいい。連絡するつもりは無いわ。きっと幸せに暮らしているはずだから。良太郎のために、何かが変わるかもしれない。そしたら私良太郎と、愛する人の子供と二人で生きていける。」

ローマに向かう準備をするみずほ。良太郎は一日のほとんどを光のCDを聞いて過ごしていた。泰之はみずほが出て行ってすぐ離婚届を提出した。泰之は分かっていた、もう自分ではみずほを幸せにできない、良太郎もどんなに愛しても同じ灯を持たない自分には幸せにできない。一人になった泰之はマンションの前にいた、家の上を通り過ぎる飛行機を見つめる泰之。そこに由佳が現れた。「吉井君」驚く泰之だった。「亡くなられたんでしょう？お線香上げさせてください。」と由佳は亮子の仏壇の前で手を合わせた。由佳は泰之に向かつて伝える。「私、結婚キャンセルしちゃった。どうしてもあなたほど好きになれなかったの。好きで、好きで、結婚しないとやっぱり駄目なのよ。良太郎君みずほさんと出ていっちゃったんでしよう？ひとりぼっちになっちゃって。かっこ悪すぎ。私でよければそばにいてあげるわよ。」驚く泰之「吉井君・・・。今なんて？」由佳はにこつと笑って「だから結婚キャンセルして今は独りなの。私ももういい年だし、私にとつてやっぱり好きで、好きで仕方ない相手だから結婚してあげてもいいわよ。今は小さな会社で働いているけどお仕事のお手伝いもできます。」泰之の表情が変わる。「子供がでけなかつたのは、相性が悪かつたのよ。私なら幸せにしてあげる。奥さんより若いからちゃんとおあなたの子供を産んであげるわ。」泰之に抱きつく由佳。「そんな・・・。でも俺には子供は・・・。」

「みずほと良太郎3人で過ごした6年間。穏やかだった6年間が遠くに消えていく気がした。由佳に言われクラリネットを習い、ローマまでみずほを迎えに行った。由佳に言われて気づいた幾つかのこと。気づかせてくれた由佳。翌日由佳は世話をしにやってくる。亮子の仏前も綺麗に片付いている。亮子にもらった手紙が供えてある。みずほの影を慕いながら由佳の行為を受け入れる泰之。泰之の中で

熱いものがわきあがってくる気がした。本当の恋、愛の意味を教えられた気がした。「私と幸せになりましたよ。」それに答え、微笑む泰之。二人で婚姻届を提出する。泰之は由佳と相談してみずほに結婚の報告の手紙を送った。俺たちは俺たちで幸せになる。みずほも自分自身と、良太郎の幸せのために生きて欲しいと。

『明日の見える道』

ローマに立つみずほと良太郎。良太郎は記憶を取り戻すことはなく、恐怖におびえたままだがみずほが抱きしめると落ち着くようになってきていた。唯一の救いは音楽には反応を示すことだった。光のCDを聞かせていた。以前のように片言ではなくイタリア語が話せるようになっていた。みずほは空港からホテルに向かいチェックインを済ませ、荷物を置き、ホテルを出てスペイン階段に向かう。スペイン階段の前に立つ、良太郎に向かって静かに話す。「あなたがまだお腹にいるとき一緒に来た場所よ。」良太郎は「……………」無言ではなさない。悲しそうなみずほは振り切るように「さあ、行きましょう。」と良太郎の手をとり歩き出す。スペイン階段で綺麗なイタリア語で良太郎にアイスクリームを買ってきて二人で食べる。良太郎はCDを聞きながらみずほと階段を上る。一番上に立つと「ローマの休日ではレンタバイクで冒険するのよ。でもお母さん、レンタバイクには乗せて上げられないから歩いていきましょう。ちょっと遠いけど頑張ってね。良太郎。」良太郎と二人、光にもらった地図を思い出しローマを歩くつもりでいた。スペイン階段から見下ろす泉の前に光がいた。見下ろすみずほの目に飛び込んできたのは……………。光の姿だった。時間が止まる二人。しばらく見つめあう二人。その姿を見ていた良太郎が話した。「お母さん？」はつと我に返るみずほ。事故以来、初めて良太郎がみずほをお母さんと呼んだのだ。良太郎を抱きしめるみずほ。二人に近寄る光。良太郎を抱きしめながら「光さん、どうして？」とたずねる。光は微笑みながら答える。「日本をたつてから日本からの飛行機がつく時間にここに来るのが

日課になっていたんだ。君に会えるとは思ってはいなかった。」光の言葉を聞き、みずほは涙を浮かべていた。怪訝そうな良太郎。光はみずほが指輪をしていないことに気づいた。良太郎の首にも指輪が無いことでみずほの今を悟ったのだ。光は良太郎とみずほの手をとり、ローマの町を歩きながら、光の部屋へ3人で向かう。「ここはあの羽のはつてあつた部屋だよ」光は扉を開け部屋に入る。ローマの住宅の部屋、中央に置かれたピアノ。その上には小さな箱の中に指輪が羽の上に保存されている。良太郎をピアノの前に座らせそのピアノで音楽を奏でる・・・みずほはピアノの上の指輪に気づき胸が苦しくなる。そこにあつたのは、あの別れた教会で光に返したあの指輪だつた。光はピアノで想い出の曲を弾きだす。Heaven's song 良太郎の表情が変わる。涙を流す良太郎。光は良太郎に話しかける。「君のところに響く音楽を僕は与えてあげられない。」みずほに視線を移し「今度こそ、僕とローマで、三人で暮らさないか？」応えることのできないまま複雑なおもいでホテルに戻るみずほ。そこはかつて泰之が迎えに来たあの同じホテル。Hotel Bolivieだつた。でも以前とは違い一人ではなく良太郎がいる。隣で眠る良太郎を見つめみずほは眠れぬ夜を過ごした翌日ホテルのベルが鳴る花屋がバラを持って立っていた。「(イタリア語)お届けものです。」みずほは「(イタリア語)有難う」と答える。そこには廊下いっぱいのバラの花が・・・「これは・・・」メッセージが添えられていた「今こそ、魔法のじゅうたんで二人を迎えに行くよ。」一緒に指輪が入っていた。6年前のあの指輪そしてペアリング。みずほは良太郎に話し始める「よく聞いてね。このバラはお母さんが愛した人から送られてきたものなの。そしてあなたが事故にあつたとき駆けつけてくれてあなたを助けてくれたの。あなたが眠りに着いたときあなたを目覚めさせてくれた人なの・・・あなたのお父さんでもあるの。お母さんが心で求めていた本当の王子様なの。」良太郎は何も言わないが混乱することなく話を聞いていた。窓の下からフルートのやさしい音色が聞こえる。窓

を開けるみずほ。そこには光の姿が。走り出す良太郎。光の前でじつと音楽を聞き入る良太郎。みずほは思い出していた、泰之が迎えに来てくれたあの日、泰之の下にかけていった自分。今は良太郎が光の下に駆けてたった。やはり光を思う気持ちにうそはつけない。心と体が一緒でないと……。光のもとに向かうみずほ。良太郎を抱きしめるみずほ。二人を見て光は「6年間を取り戻そう、今までのことちゃんと僕にはなして。僕も話すから。あの頃の二人に戻るう。」と告げる。ホテルを引き払い、3人で光の自宅に向かう。光の部屋で良太郎はピアノで遊んでいる。窓辺で二人は話し出す。6年間回想。「泰之さんは光さんを追って流産しそうになった私を助けてくれた。良太郎が無事に生まれて、3歳の時にはピアノを買ってくれた。幼稚園の入園式一緒に行ってくれた、毎年の誕生日のお祝いもしてくれた。幼稚園の演奏会にも来てくれた。良太郎が事故にあつたときも、あなたを呼んでくれた、良太郎のために……。そんな泰之さんの愛情を置き去りにして家を出てきてしまった。でも以前感じた思いは無いの、後悔はしていない。」静かに目を閉じ泰之に思いをはせるみずほ。そのみずほに光は優しく話し始める。「この6年で僕は多くの人を傷つけた。君を愛したままの僕でも結婚したいといってくれた、志織と3年前結婚した。一人娘が生まれた。でも、彼女とは夫婦になれず、ローマでの音楽仲間の男性にプロポーズされ、彼を選んで出て行った。ウィーンで志織は再婚したよ。今は幸せに暮らしている。やはり人生を共にする女性は君だけだった。」そばではさつきまでピアノを触っていた良太郎が安心してたかのように眠りにについていた。眠りに着いた良太郎に気づいた光は良太郎をソファーに寝かし、窓辺に立つみずほをそつと後ろから抱きしめる。「僕たちは何度も翼を閉じながら自由に自由の翼を手に入れたんだね。何度も手を差し伸べあつては傷つけてきた。でも僕たちの子供があるべき場所へ導いてくれた。」二人抱き合い結ばれる。ベッドの中でみずほの左手の薬指に指輪が光っていた。光に抱かれながら「前はあなたと結ばれてあなたが遠くに行ってしまった

た気がした。幸せだったのに……。今はこんなに満ち足りている。手を伸ばせばあなたがいる。何て幸せなことなんだろう。」「みずほの言葉に答える光。」「どんなに傷ついても心と体が一緒でなければならぬ」と志織に言われた。彼女は前を向いて歩いている。心配ない。僕も前を向いて歩いていける。3人で前を向いて歩いて行こう。」「光に寄り添いみずほは光の鼓動を聞きながら答える。」「光さんと生きている。長い道のりだった……。何度も電車を乗り違えた。昔ホームであなたを見つけて追いかけたかった。でも気持ちを抑えて主人と違う電車に乗って……。そのせいであなたを傷つけてしまった。……。ごめんなさい。わがまま言っただけで子供を産んで……。けどやっぱり光さんが心にいるの。どんな魔法をかけてもらっても主人じゃ駄目だった。香山家のかごの中には戻れなかった。……。こんな気持ちを知ってしまったから、後戻りできない電車に乗ってしまったっていたのね。……。いろんな人を傷つけていっぱい涙も流したけど。あなたのそばが一番安らぐの。イタリア語教室もどうしてもやめられなかった。ローマを忘れることはできなかった。」「ベツドから出て、「おいで」とみずほをピアノのほうに招く光。二人の思い出の曲FLYINGを奏でる光。涙が止まらないみずほ。曲を終え光がみずほに視線を移す。」「この曲は君への応援歌として作ったんだ。あのホテルの置いてきた楽譜の曲だよ。CDじゃなく僕のことを聞いてくれるかな?」「やさしい、力強さを与えてくれる曲……。まるで暖かい羽に包まれ、ゆれているようにうっとり聞き入るみずほ。おきてきた良太郎。光は良太郎に視線を向ける。」「ごめんね。起こしてしまっただよ。君の悲しみはボクが引き受けたからもう大丈夫。これからはお母さんと穏やかに過ごそう。」「光の言葉を聞き事故後初めて笑う良太郎。みずほが抱きしめる。」「僕この曲好きだよ。」「光のピアノに惹かれていく良太郎。事故後、初めて話す良太郎に涙が止まらないみずほ。久しぶりに聞いた良太郎の言葉、それが光の音楽が好きだといってくれた。光と向き合う良太郎を見ながら「心のろうそくがつかっているとわかり合えるのね。あなた

の子供でよかった。私は幸せ者だわ。泰之さんに愛され、義母にも愛されて、父にも母にも看護られ、光さんにも愛してもらって。幸せすぎてまた罰が当たったらどうしよう。」不安がるみずほを抱きしめる。耳元で光が囁く。「何も悪いことはしていない。苦しむことも寂しがることも無い。心を隠す必要も無い。幸せになるんだ。三人で。このローマで。良太郎の新しい記憶を作っていくんだ。」光に抱きしめられ幸せそうな母の姿を見て微笑む良太郎がいた。翌日3人で新しく羽をつけた地図を持ってローマを楽しむ。光とみずほの左手の薬指には真新しい結婚指輪が光っていた。みずほは本当に愛する二人に囲まれ幸せに包まれていた。十日間ローマを楽しんだ。戻って生活できるように家族のものも買い揃えた。

十日後、光と三人で郡山に戻り、父の墓前に報告した。郡山の実家には泰之・由佳の結婚報告の手紙が届いていた。安心したかのみずほに「君の家族、泰之さんは幸せを見つけ結婚して他の女性の王子様になった。幸せになっている。僕たちも良太郎の新しい記憶を作っていかねければならないね。」郡山の実家を片付けた。光は日本のみずほの実家を引き払うことはできないと管理を依頼した。再び光とローマで生活を始める三人。3人がこの上ない微笑を浮かべて暮らす。愛と音楽に囲まれて・・・何処までも続く、しあわせな道。

《6年後のローマ》

良太郎がスポットライトを浴びステージの上にあった。ピアノコンクール、わずか十一歳で良太郎は優勝したのだった。客席で見守る光とみずほ、その横には五歳の男の子と三歳の女の子が一緒にいた。良太郎の弟妹だ。拍手の中誇らしげな良太郎。記憶の戻らない良太郎だったが新しい記憶と共に音楽の道を歩んでいた。光を父と呼んで弟妹と一緒に家族で過ごしていた。堀井良太郎の祝賀パーティーが行われた。志織たち夫妻も子供たち三人をつれて祝福してくれる。長い時間をかけて分かり合った大人たちの姿があった。堀井良太郎の母としてパーティーにでたみずほ。そこには以前の惨めだった舞踏会とは違い自信に満ちてみんなと会話するみずほがいた。そんな

みずほを見つめる光。良太郎が志織たちの娘とダンスを踊る。異母兄妹のダンス。子供たちも自分の生い立ちを受け入れていた。光の下に寄り添い光の隣でみずほはつぶやく、「昔、光さんが女のひとダンスをしている姿を見て、胸が苦しくて、苦しくて……。あのとき私はあの女の人に嫉妬したんだわ。おかげで光さんに対する気持ちに気づいたんだ。……昔を懐かしむみずほ。「君にはもう絶対に解けない魔法がかかっているんだ。あんな思いはさせない。」にっこり微笑んで見つめあい光は続ける「良太郎は誰の王子様になるんだろうな。」見つめあい微笑む二人。親子五人陽だまりのような幸せの中にいた。

《6年後の日本》

泰之のマンションでは子供たちが騒いでいる。良太郎の使っていたピアノはそのままの兄妹が使っている。由佳と康之には子供が生まれ幸せに過ごしていた。TVで良太郎のニュースを聞く泰之。泰之の中ではまだ良太郎は息子だった。誇らしげな泰之を見て由佳は「良かったわね。良太郎君幸せに暮らしていて、みずほさんも幸せに暮らしているわ。私たちも負けられないように幸せに暮らしていかなきゃ。王子様は間違えては駄目なのよ。私にはあなたにかけた魔法がかかっているから幸せなはずよ。」由佳の言葉にうなづく泰之「そうだな。がんばって子供たちに恥ずかしくない生き方を、しなくちやな。」マンションの外は澄みきった青空が何処までも続いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2929c/>

ミセスシンデレラーその後ー

2010年10月27日12時37分発行